

「ヌサンタラのライオン(1)」(2021年03月03日)

ライオンを意味するインドネシア語 *singa* がインドネシアで地名に使われている。バリ島北岸の町シガラジャ *Singaraja* がそれだ。この町の歴史は古いが、もっと古いバリ島の歴史を先に語らなければならぬだろう。

西暦紀元8世紀にジャワ島中部を支配して威勢をふるった王国があった。この王国は10世紀になって東ジャワに王都を移している。このムダン *Medang* 王国はバリ島を征服し、ワルマデワ *Sri Kesari Warmadewa* を現地に送ってバリ島の行政統治を行わせた。バリ島史においては、このワルマデワ王がバリ島最初の王とされている。ワルマデワはギアニャルのウブツ *Ubud* に近いブドウル *Bedulu* に都を置いて国名をブダフル *Bedahulu* 王国と称した。ブダフル王国はマジャパヒツ *Majapahit* 王国の宰相ガジャ・マダ *Gajah Mada* によって征服され、1343年にクルンクン *Klungkung* のゲルゲル *Gelgel* に都を移した。

ブダフル王国の時代に、王都から各地に地方官が派遣されて現地行政が行われた。バリ島北部の現在ブレレン *Buleleng* 県になっている領域はグラ・ジュランティツ *I Gusti Ngurah Jelantik* が代々の領主となって統治した。ブダフル王国の地方行政首長であり、地方領主ということになる。地元民にとってはかれが王と見なされるだろう。グラ・ジュランティツという名称は代々の世襲で引き継がれたものだから、本来なら第何世という言葉が付けられるべきものと思われる。

17世紀半ばごろ、領主グラ・ジュランティツの側室のひとり、パンジ村のスードラ階級出身の女の子が子供を産んだ。グデ・パスカン *I Gusti Gede Pasekan* と命名された少年はすくすくと成長したが、神通力がその子の身に備わっていることが明らかになると、正妻が産んだ長男に領主の地位が譲り渡されなければならない伝統慣習が自分の代に守られなくなるのではないかという心配が父親の心に湧いた。

12歳のグデ・パスカンは贅沢な領主館の暮らしから、母親と共に貧しいパンジ村に追いやられたのである。しかし成長したかれに自ずと庶民からの人気が集まり、最終的に、ゲルゲルのバリ島最高支配者に承認されて、かれがブレレンの領主に成り代わってしまった。新王はアンルラ・パンジ・サクティ *I Gusti Anglurah Panji Sakti* という領主名で1660年にその地位に就いた。それがブレレン王国の発端だとインドネシア語ウィキに記されている。

最初、王宮は山の上のスカサダ *Sukasada* に置かれていたが、激しい海賊の横行に対処するために王宮は海岸部に置くのがよいと判断して、かれは現在のシガラジャの町を開いた。勇猛果敢な王に率

いられたブレレンの軍勢は海賊を寄せつけなくなり、その海賊対策によってかれの名声は大いに高まり、領民からもたいへん喜ばれたという話だ。そのときかれは、ブギス人の船を守るために超能力を使って巨大な船を海岸に引き寄せたというエピソードも語られている。しかしブレレン県史によれば、シガラジャの町が作られたのは1604年3月30日であり、それがシガラジャの町の創設記念日とされている。インドネシア語ウィキのブレレン王国誕生1660年とはだいぶかけ離れている。

この町の名称にライオンという言葉が使われたのは、創設者アンルラ・パンジ・サクティの百獣の王にたとえられるべき勇猛さにちなんだものだと説明されている。ちなみにシガラジャの語順はムラユ式でなくサンスクリット式であるため、前の言葉が後に掛かって行く。シガラジャは「王であるライオン」でなくて「ライオン王」なのである。

オランダ植民地政庁がブレレン王国を征服したのは1846年で、シガラジャはその当時バリ島トップレベルの政治経済都市だった。南部のクタやデンパサルが発展するのはもっと後になってからだ。そのために1958年までシガラジャはバリ島の首府であり、また小スンダ列島の首府にもなっていた。
[続く]

「ヌサンタラのライオン(2)」(2021年03月04日)

東ジャワ州にはマラン Malang の近くにシガサリ Singasari があって、これはマジャパヒツ王国の前にジャワを支配した王国の名称にもなった。シガサリ王国最後の王、クルタヌガラ Kertanegara の時、ヌサンタラを鎮撫しようとして中国の元王朝が派遣してきた使節を傷付けて追い返したために元のジャワ島征伐軍を迎える破目になった。

シガサリ王国は元軍到着前に反乱で崩壊したが、クルタヌガラの婿ラデン・ウィジャヤの調略で反乱者は元軍に滅ぼされ、ジャワ島征服戦は終わったと思って油断していた元軍を今度はラデン・ウィジャヤの軍勢が撃ち払ってマジャパヒツ王国を建設したという歴史になっている。

西ジャワ州タシマラヤ Tasikmalaya にもライオンの名前のついた地名がある。シガパルナ Singaparna 郡はタシマラヤの町の西側に隣接している。この地名の由来はよく分からないのだが、16世紀のガルングン Galunggung 王国第七代の王プラブ・ラジャディプタン Prabu Rajadipuntang の王子のひとりがその名前であり、そのためにその王子に由来を結びつける説がある。

西ジャワにはまたガルツ Garut 県にシガジャヤ Singajaya 郡もあり、バンドン市の南西郊外にはシガ Singa 山もある。そしてスマトラ島にも、シガ Singa という名の村があちこちに存在している。

シガパルナ王子の例に見られるのと同じように、北スマトラ地方のバタツ Batak 族にはシシガマガラジャ Sisingamangaraja という名の王様がいる。昔のヒンドゥーブッダ時代の王侯貴族の中にはシガあるいはシンハの言葉を含んだ人名がさまざまに登場しているのである。シンハウィクラマワルダナ Singhawikramawardhana はマジャパヒツの王であり、キラタシンハ Kirathasingha はカリंगा王国の王なのだ。それらの事実は、その昔ライオンがヌサンタラに棲息していたことを示すものなのだろうか？

ライオンの歴史的棲息分布図を見るなら、アフリカを主体に北はバルカン半島南部、東はインド亜大陸までがその領域であって、ヌサンタラは含まれていない。古代からヌサンタラにライオンが棲息したことはなかったと考古学者は語っている。ならば、どうしてライオンという言葉がヌサンタラのあちこちに散見されるのか？その答えはどうやら、サンスクリット文化がもたらしたものだっただろう。中国にライオンはおらず、日本にだっていたことがない。にもかかわらず、遠い昔から獅子という名の動物のことが知られていたのと同じだろう。

サンスクリット語でライオンはシンハ singha と呼ばれた。サンスクリット文字からの移し替えは simha となるようだが、発音はシンハになっている。ちなみに、古代ジャワ島に入って来たサンスクリット語が土着化して古代ジャワ語と混じり合い、主に王宮の文書に使われていた言葉はカウィ語 bahasa Kawi と呼ばれ、きわめて多数のサンスクリット語を含んでいた。言うまでもなく、元の語義に忠実なものもあれば、語義が変化してしまったものもある。

そのカウィ語の中に間違いもなくシンハが含まれている。カウィ語辞典を調べてみるなら、singha の語義は harimau, kuat, singa となっていて、ジャワで最強の動物の意味が第一義、強いことが第二義、現代におけるライオンの意味が第三義になっている。辞典にはさらに singhabarong がシンハと同義語、singhaderrya の語義はライオンのように勇猛な、また singhakara はライオンのように目立つ、singhakrti はライオンのように堂々としたの意味で、singhanada が歓呼の声、singhanabda は唸り声、singhasana 玉座、singhawikrama ライオンの勇猛さ、などの言葉が採録されている。はたして古代ジャワ人は毛皮でもライオンを見たことがあるのかないかよく分からないが、シンハの概念はひとびとの精神生活にしっかりと入り込んでいた印象を受ける。[続く]

「ヌサンタラのライオン(3)」(2021年03月05日)

ヒンドゥー文化では、ライオンはウィスヌ神の化身のひとつとされ、Narasimha と表記されて崇められた。

ブッダつまりゴータマ・シッダルタにはシャキヤ Sakyā 族のライオンというあだ名が与えられているし、仏教でシンハはダルマの守護者であると考えられている。余談になるが、ブッダ(佛陀)という言葉はサンスクリット語の budh に由来していて、原義は固有名詞や抽象名詞でなく動名詞であり、budi というインドネシア語になって取り込まれている。仏教用語にある「菩提薩多」という言葉もどうやらインドネシア語で budi-satwa に該当しているように思われ、難しい仏教用語もインドネシア語で理解すると分かりやすいのではないかという気がわたしにはする。

インドでは太古の時代からライオンの像が王宮や寺院に置かれて、人間のライオンに対する憧憬が大きかったことをそれが示しているように思われる。日本の狛犬の習慣はどうやらそのような現象に関連しているようで、インドの仏教文化が中国に伝わり、日本に流入してくるときに宗教の本質を取り囲む文化様式として入って来たのではあるまいか。インド人にシン Singh、シンガ Singha、シンハ Sinha などの姓があるのは、かれらは元々クサトリア階級の出自で、戦士の家系であるためにライオンの強さにあやかって取られたものと考えられている。だが、それだけではないだろう。ライオンのイメージを姓に持つということは、単に強い・勇ましいという印象だけでなく、ライオンという存在あるいはその言葉に善・秀・貴の語感が付随してこそ起こり得るものだとわたしは思う。

こうして古代ジャワにヒンドゥー=ブッダ文化が入ってきたとき、シンハというものの概念と価値観がもたらされた。古代ジャワでチャンディがたくさん建設されたとき、高貴な者が関わったチャンディはまず間違いなしにシンハの像やレリーフが建物を飾ったようだ。

チャンディポロブドゥル Candi Borobudur に置かれているシンハの像は32個を超えているし、レリーフに描かれているシンハも数多い。面白いのはシンハの像に角のあるものがあることで、日本の狛犬の像にも角があるものがあり、別系統で伝来したものではあっても由来の類似性を感じさせてくれる。

ヌサンタラのひとびとにとってシンハというものはインド人が描いた神話的存在として受容されたものであり、しかもインド人が抱いた価値観がそのまま受容されたわけだから、シンハという言葉を地名姓名などのアトリビュートに使うことは特別な意味を持っていたにちがいない。そのように価値のあるシンハが欠けているチャンディというのは、作られたときから下層低級のチャンディだったという見方がなされるのも当然だと言えないだろうか。

シンハは善と守護の神通力を持ち、厄を払い、不浄を清めるものとして尊重された。動物と見なされず、架空の抽象的な存在であって、現代のわれわれがシガ singa をライオンと同一視する視点は昔のヌサンタラにおいてほとんど希薄なものでしかなかったのではあるまいか。それはきっと、中国や日本における獅子と似たようなものだったように感じられる。

北スマトラのバタツ族にもシンハの文化があり、かれらは日用品にシンハの彫刻を施して厄除けと守護のシンボルに使っている。シンハの像も作られるが、往々にして人間・水牛・ワニが合体したような姿で作られる。顔は長く、カッと見開かれた目、彫りの深い鼻、らせん状の長いあごひげなどが特徴的だ。

バタツでシンハはナガ naga(龍)と融合されてしまい、シンハがナガやボルサニアンナガ Boru Saniang Naga と呼ばれることもある。ジャワにも類似の現象があって、ジャワ人もシガナガ singa naga あるいはナガシガ naga singa という言葉を使う。[続く]

「ヌサンタラのライオン(4)」(2021年03月08日)

さてインドから中国に、仏教と共にシンハの観念がもたらされたと想定しよう。きっとヌサンタラと似たようなことが中国で起こったはずだ。しかし中国人は言葉として獅を選択した。英語ウィクショナリーによれば、その文字は漢の時代にペルシャ語に由来して採られたとのことで、ライオンを意味するペルシャ語の音スールやセールが古代中国音のスーやセーに該当する獅の文字にあてられたと説明されている。しかし中国での言葉がペルシャ起源であったとしても、文化的な面においては、インドのシンハが強く影響したのではあるまいか。中国でも昔は獅子の像を公私のさまざまな場所に置いていたという話があり、インドやヌサンタラでも似たようなことが行われていたから、その面に太いつながりが感じられるのだが、ペルシャはいったいどうだったのだろうか？

獅という文字は福建語でサイと発音されて、獅子舞を意味するインドネシア語バロンサイ barongsai の中に使われている。中国で獅子は厄除けと招福のシンボルになった。祝祭に獅子舞が演じられるのはそれが最大の目的だろう。インドネシアでもバロンサイは、その曲芸的な魅力が華人ばかりかプリブミ大衆をも魅了しており、いかに華人嫌いのプリブミでもドゥクドゥクモンのリズムを聞くと尻がこそばゆくなってくるようだ。

バロンサイのサイが獅に由来しているのに対してバロンは、カウイ語にシンハバロンがあるように、サンスクリット語に由来するものだったのだろうか？サンスクリット語に堪能な方にご教示願いたいものである。なにしろ、barong を表すサンスクリット文字を入れてオンライン辞典を調べると、バリの伝統舞踊に出てくる聖獣という説明に出会うだけなので、五里霧中という感触である。

インドネシア語や英語のネット情報によれば、バロンはヌサンタラの語彙のように思われるが、語源に関する定説があるわけではない。ジャワとバリで神話に登場する四つ足動物バロガン barongan のことだと言われても、そこからどう遡ればよいのか見当もつかない。

一説では、古代ムラユ＝ポリネシア系語彙である baruang だと主張されていて、バルアンは現代インドネシア語 beruang になっており、それは熊を指している。福建語でライオン踊りを弄獅 lang-sai というので、そこに由来しているという説もあるのだが、もしそうであるならムラユのひとつとは普段から l と r の区別ができているのだから、balongsai となるほうが自然ではあるまいか。



Reog@Madiun 2007/12/30

現代インドネシア語では、カウイ語の singhabarong は singabarong に変化し、ジャワ語ではシゴバロンと発音される。シゴバロンは東ジャワ州ポノロゴ Ponorogo に伝わる伝統芸能レオツ reog に登場する。

シゴバロンは、トラの頭と羽を広げた孔雀を飾った巨大なコスチュームを担いだ、レオツで一番派手な出

演者であり、常にレオツのシンボルとして扱われるから、その名前がレオツであり、それが主役だと思ってしまうひと現れるのだが、本当はそうでない。その演者が務める役の名前がシゴバロンであり、バロガン barongan と呼ばれる縦横およそ2.3メートルで4050キログラムも重量のある巨大なコスチュームを担いでシゴバロンを演じるのだ。バロガンは木と籐の枠にトラの頭と孔雀を載せ、トラの皮を張ったもので、色鮮やかに装飾されているので、観客の視線は自ずとそこに集まって来る。

この演者はバロガンを歯で噛み、手を枠に添えて保持しながら踊るから、顔はコスチュームの裏に隠れてしまい、あたかも巨大なトラが人間のような手足を持って動いている印象を見る者に与えることになる。そう、シゴバロンとはトラの王様なのである。もちろん、手を枠から放すこともあるので、そのときは口と歯だけが4050キロの重量を支えることになる。[続く]

シゴバロンの他にもこのショーにはワロツ warok、ジャティラン jathilan、ブジャンガノン bujang ganong たちが登場して、単なる舞踊芸能を超えた野天における集団舞踊劇のおもむきをふんだんに感じさせてくれるものだ。もちろん、ガムランとルバブの音楽団が歌唱を伴って伴奏を続ける。

ワロツというのは男性舞踊者で、見るからに男っぽい姿で格闘技の形を舞う。ワロツはジャワで言うカヌラガン kanuragan をマスターし、人間生活の機微を深く認識して人間の生き方をもマスターした者という想定になっていて、つまりは昔のジャワにあった男の理想像の具象化という意味付けがなされて

いるようだ。カヌラガンとは超自然の術が加味された格闘技のことであり、ワロツは一般の者に善き生き方を教え指導できる人間、つまりウワラ wewarah を語源にしている、とされている。

一度身に着けた超自然の術は女との性交によって失われてしまうとされていて、超自然の術を維持しようとするなら女との交わりは禁忌になり、そのためにワロツは寵童を持つことになる。グンブラツ gemblak と呼ばれる寵童をワロツは身辺から放さず、グンブラツがあたかも妻のようにワロツの世話を焼くのである。だからワロツが街中に出るときもグンブラツを連れ歩き、自分と寵童の関係を世間に見せつける。そうすることで世間はそのワロツが超自然の術を維持している真の男であるという認識を抱く。現代西洋文明の中にかれの居場所はきっとあるまい。

ジャティランは騎馬兵団を象徴したものだ。踊り手は馬型にまたがるような恰好で軽快な群舞を見せてくれる。元々、レオツは男性ばかりが出演した。ジャティランも女性っぽい動きをする男性たちが踊っていたのだが、1980年代にジャカルタフェアに招かれたとき、娘たちのジャティランに代えて公表を博した。それ以来、この騎馬兵団は女性が演じるようになったそうだ。

ブジャンガノンにはワロツ風の老人の姿をしている。かれは道化として登場するため、ワロツやジャティランが集団で群舞を披露するのに反して、ひとりだけで出てくる。コミカルな所作や時に観客を誘って面白おかしく舞台を盛り上げるので、子供たちには特に人気の高い登場人物だ。ブジャンガノンの正式名はパティ・プジョンゴ・アノム Patih Pujangga Anom であり、かれの格闘技術は並みのワロツをはるかに凌駕するものなのである。

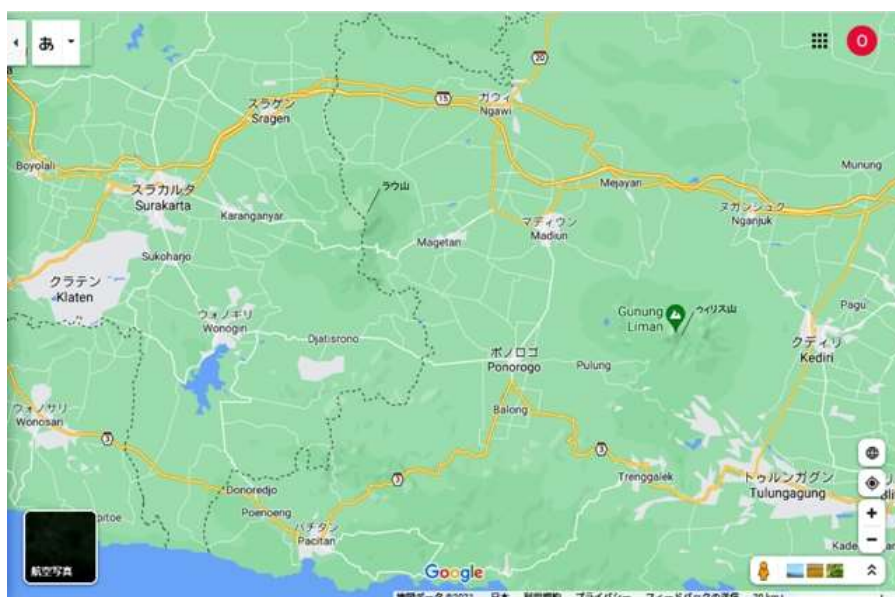
このレオツポノゴは5百年の歴史を持っていると考えられているが、オルバ政権はこの芸能の上演を禁止したことがある。アンチスハルト勢力がこの舞踊劇で民衆を集め、そこで反スハルト思想を民衆に注入することを恐れたためだったという話だ。全編が武張った雰囲気を感じていくのだから、雰囲気は呑まれて戦闘的な精神に変化する素朴な人間が出るだろうことは確かに想像できるのだが。集団催眠が日常的な社会でなければ、そのような懸念は起きないかもしれない。

このレオツポノゴには故事来歴がある。ずっと昔、今のポノゴ地方にバンタルアギン Bantarangin という名の王国ができた。これはポノゴ地方に伝わる伝説である。

王国とは言っても、広範な地域を支配し、地方領主の上に立って全小王に号令するような規模のものでなく、多分地方領主程度の権勢を持ったものだったように思われる。バンタルアギン王国の発端は、クロノ・スウォンドノ Kelana Sewandana が王位に就いたときに始まる。この話はあるレオツグループのリーダーの長老が語ったものであり、語り手が変わると話の中身も変わってくるのが口承社会の常識だから、口承社会にはオーセンティックな物語はないと思って身構えるほうが読者は精神の安定を

保てるだろう。[続く]

「ヌサンタラのライオン(6)」(2021年03月10日)



バンタルアギン王国は西のラウ山 Gunung Lawu と東のウリス山 Gunung Wilis にはさまれた、うっそうたる密林に閉ざされたエリアだった。最初その地を開いたのは三人の聖者で、クロノ・スウォンドノとプジョンゴ・アノムがそこへやって来て、支配者になった。

そのふたりはラウ山に住む聖人バラモンのスナン・ラウ Ki Sunan Lawu に弟子入りして修行を積み、師から免許皆伝を受けて下界に下りて来たのである。カヌラガンの術をマスターしたふたりを送り出すとき、師はスウォンドノに鞭サマンディマンを与え、師の許しを得ずにこの鞭を使ってはならぬ、と禁じた。プジョンゴ・アノムは白ヤマアランのお守りを与えられた。そして女を遠ざけなければ免許皆伝を得たカヌラガンの術は維持できないとの警告も与えられた。

ふたりはバンタルアギンの地にやってきて、そこを新天地にしようと考え、スウォンドノが王になり、プジョンゴ・アノムが宰相になった。ふたりのカヌラガンの術がたいそう優れていたことから、近隣の村々の住民はこぞってプラブ Prabu・スウォンドノを指導者に仰ぎ、王国としてふさわしい兵力が整えられ、ワロッ軍団や騎馬兵団を中核とする王国軍が生まれた。王と宰相が手ずから戦闘技を指導したため、強力な軍隊ができあがったのである。

強力な軍隊のおかげで、バンタルアギンの地を支配下に組み込もうとして攻めてくる隣国もなく、王と宰相以下、全員が平穏な暮らしを楽しんでいた。王も宰相も師の教えを守り、結婚をせずに見目麗しい寵童を何人も持って暮らしていた。王国の幹部たちもみなワロッであり、王と宰相に従ってグンブラックを持った。ところが、長引く平和の陰で、何かがおかしいという感触を持つひとびとが増えてきた。プラブ・スウォンドノもそのひとりだった。

このまま自分が年老いて行けば、次の王になるのはいったい誰なのか？王の血を受け継いだ王子が王位を継承することが行われなければ、次代の王位をめぐる血の嵐が吹きすさぶかもしれない。それでは、平和は保たれないではないか。

王と宰相は相談し、王妃を迎えようということに意見が一致した。自分が身に着けた神通力の術が使えなくなるのは、仕方のないことだ。王の護衛兵が強ければ、そのような術は王にとって宝の持ち腐れになるだけだ。さて王妃はだれがいいだろうか？

クディリ Kediri の王宮に比類ない美貌と人格優れた姫がいるという話が耳に入った。その名をディヤ・アユ・ソング・ラギツ Dyah Ayu Sangga Langit と言う。プラブ・スウォンドノの妃として申し分あるまい。ならば、その姫をもらい受けるためにクディリ王ルンブ・アミセノ Lembu Amisena に申し入れの使節を送ろう。宰相、そちが直々に参るよう。

プジョンゴ・アノムの使節団は華麗に着飾ったワロッ軍団や騎馬兵団を従え、貢納品を携えてクディリに向かった。一行はウィリス山南麓を通過して、山の向こう側にあるクディリに向かう。

当時、トゥルンガグン Tulungagung 一帯は道なき道の奥深い森林のど真ん中。野獣と魔物が支配する地域であり、このウンクル Wengker と呼ばれる魔界は東ジャワ南部地方に延々と続いていた。ブリタル Blitar に近いロドヨ Lodoyo という土地にシゴバロンという名のトラの王がいて、あるとき夢を見た。ロドヨは洪水で滅び、手下のトラや他の野獣は全滅し、シゴバロンとかれが可愛がっている孔雀だけが生き残るのだそうだ。シゴバロンは敵の侵略を懸念した。直ちに部下の野獣たちを集め、特にトラの群れに対して魔界の西の果てを厳重に見張るよう命じた。軍勢を通してはならぬ。トラ戦闘部隊はトゥルンガグン目指して走った。シゴバロンもその後を追ってゆっくりと西に向かった。[続く]

「ヌサンタラのライオン(7)」(2021年03月12日)

トラの群れがトゥルンガグンの森の中を哨戒しているとき、プジョンゴ・アノムの使節団がやってきたのである。その行く手をトラ戦闘部隊がふさいだ。この先へ進むことはまかりならぬ。きびすを返して立ち去れ。

プジョンゴ・アノムは交渉した。われわれはクディリへ行くためにここを通り抜けるだけだ。この森の住民に危害を加えるようなことは決してしない。

だが交渉は決裂して戦いが始まった。バンタルアギンの軍勢も強いがトラの群れも強い。互いに犠牲者が増えるばかりで、戦線は膠着状態になった。プジョンゴ・アノムはプラブ・スウォンドノに急使を送り、事態を報告させた。プラブ・スウォンドノは怒髪天を衝き、サマンディマンの鞭を手にするや、護衛兵に出動を命じ、自ら馬に乗って駆け出した。

戦場に到着すると、プラブ・スウォンドノはサマンディマンを抜き放ち、地面に一打ち二打ちするのもどかしく、敵の大將めがけて鞭を振るった。サマンディマンの神通力は地面に一打ちするだけで雷の轟きを発し、地面が揺れ動く。その威力にシゴバロンはすくみあがった。鞭を数発からだに受けると、シゴバロンは戦闘意欲を失って地面に寝そべり、プラブ・スウォンドノに命乞いをした。

どうか生命ばかりはお助けください。わが身は生涯あなた様にお仕えし、わが子孫もあなた様の子孫に永遠にお仕えすることを誓います。プラブ・スウォンドノはその言葉を聞き入れてシゴバロンを赦し、魔界の野獣たちは一旦その場を立ち去った。

とんだ邪魔が入って時間を浪費してしまった使節団一行は、既に無傷の貢納品もなくなってしまったことから、プジョンゴ・アノムがひとりでクディリに急ぐことになった。かれひとりなら、白ヤマアラシの術で地中をくぐり抜けてクディリに行くことができる。

山の奥深い場所にいたスナン・ラウは東の方で轟いた鞭の音を聞いた。あれはサマンディマンの音だ。スウォンドノめ。わしの許しも得ずにサマンディマンを使いおったな。ひとつ懲らしめねばなるまい。

スナン・ラウの瞑想の中に、スウォンドノに関わる状況が丸見えになった。スナン・ラウは元々スウォンドノに期待をかけていたのである。この男は天下を取る人間だ。だがバンタルアギンの地におさまってしまえば、小成しか得られない。クディリの姫をもらってバンタルアギンの領主ふぜいになるのであれば、わしの期待はもう終わりじゃわい。

スナン・ラウは魂を肉体から解き放つ術を使ってクディリに飛んだ。そしてソング・ラギッ姫の体内に入ると、プジョンゴ・アノムが来るのを待った。やってきたプジョンゴ・アノムはクディリ王に正使としての口上を述べ、貢納品がすべておじゃんになったことを説明した。クディリ王は近年とみに名声の高まっているプラブ・スウォンドノを婿にできることを諒とし、本人の気持ちを確かめるために姫をその場に呼んだ。

やってきたソング・ラギッ姫は頬を染めてうつむきながら語った。もしもプラブ・スウォンドノがわたくしの望むことを聞き届けてくださるのなら、わたくしは喜んでプラブの妻となり、王妃となりましょう。もしもこれを成し遂げてくださるのなら。

1. 花婿行列は魔界の端からクディリのアルナルンまで、地下を通ってくださいな。
2. 花婿行列の演じ物は、これまでこの世のどこにもなかった芸で愉ませてくださいな。
3. 行列に付き添う騎馬兵は、騎乗が達者で勇猛果敢な若者たちで、すべて見目麗しい者を144人そろえてくださいな。

これはスナン・ラウの魂が姫に言わせたことであり、もちろん姫はそれを自分の考えだと思って話している。[続く]

「ヌサンタラのライオン(8)」(2021年03月15日)

プジョンゴ・アノムはこの成り行きを急いでスウォンドノに報告した。スウォンドノは取り巻きを全員召集して相談した。シゴバロンも、バンタルアギンの地を開いた三人の聖者もそれに加わった。

1. 三人の聖者はそれぞれがワロググループを率いる。
2. シゴバロンと孔雀はムラツバロン Merak Barong になる。
3. プジョンゴ・アノムは騎馬の達者な見目麗しい144人の若者を率いて、整然たる動きを見せる。そのよく整った軽快な動きはジャティランと呼ばれるようになった。

こうして花婿行列の準備が整えられている間、地下道作りが進められたのだが、どうも進捗状況がぱっとしない。プラブ・スウォンドノは秘宝サマンディマンの鞭を使うことにした。鞭を打ち鳴らして大地を揺さぶれば、地下道作りが楽になる。

ところが大地が震動したとき、スナン・ラウがどこからともなく現れた。二度も師の戒めを破れば、ただではすまない。スナン・ラウはプラブ・スウォンドノに、汝の未来を選択せよと迫った。

1. 現世から来世に至るまで、バンタルアギンの全住民ばかりか他の地でも永遠にその名がほめたたえられ、あらゆる人間に尊敬され、誉として語り継がれる。
2. ニ、ソング・ラギッ姫を妃にするが、子供は得られず、バンタルアギン王国は消滅し、歴史すら残らない。

その難問に、その場の空気は一瞬にして凍り付いた。全員の視線がプラブ・スウォンドノの口元に集まる。スウォンドノはおもむろに口を開いた。師よ、わたしは一を選びたい。その理由は、わたしが終世の名誉を得たいがためにあらず。バンタルアギン王国が滅びることは、わたしひとりが滅びるのでなく、かれら全領民が滅びることを意味している。どうしてわたしにそんなことができようか。

凍り付いた空気は歓呼の声となっちはじけた。スナン・ラウは周辺にいるひとびとに尋ねた。ほんとうにそれで良いのか？おまえたちが苦勞して準備してきた花婿行列のすべてがパーになるのだぞ。歓呼の声はもう一度、その答えを叫んだ。「ストウジュウ！」しかし花婿行列の趣向はパーにならなかったのである。ひとびとは祝祭のたびに、その趣向を再現したのだから。その伝統は今日までも絶えることなく続けられている。

そのレオツポノゴにかなりよく似た芸能がポノゴからまっすぐ100キロほど北に離れたブローラ Blora でも演じられている。ブローラの舞踊劇はバロガンブンボンアミジョヨ Barongan Gembong Amijoyo と呼ばれ、それに登場するトラの王シゴバロンは人間の化身という筋立てになっている。ブローラに伝わるバロガンの由来物語では、地方領主を意味するアディパティ Adipati のブンボン・アミジョヨという人物がトラの大王シゴバロンに変身してクロノ・スウォンドノと戦う話になっているのだ。

舞踊劇にはレオツで見られるようなシゴバロンの巨大なバロガンも登場するが、それに随順する多数のトラの子分たちも出演する。トラの子分たちは日本の獅子舞のような面をかぶって群舞を繰り広げるので、レオツに劣らない面白さがある。

ポノゴでは、舞踊劇はレオツと呼ばれ、バロガンはシゴバロンのコスチュームを指していたが、ブローラでは舞踊劇そのものがバロガンと呼ばれていることに注目すべきだろう。このバロガンという言葉を検査すると、「ショーとして、singa などの野獣に似せた扮装で、中に人間が入って動かすもの」となっている。これだとバリ島のバロンダンスそのままの説明になってしまうように思われるのだが、バリではバロンダンスをバロガンという類語で呼んでいる印象があまりない。[続く]

「ヌサンタラのライオン(9)」(2021年03月16日)

ならば、とKBBIでバロンの語義を調べると、チャロンアランの物語劇で演じられる、野獣(singa)の面と衣装を用いた踊りで、二人の人間が頭と尻に入っていく、と説明されている。しかもバリ語由来のインドネシア語として採録されているので、どうやらバリ人はバロンダンスをバロガンと叫ばない雰囲気を感じられる。

ちなみにヌサンタラのバロン芸能の一覧表があつて、それを見ると次のように記されている。()内はその芸能の中心地または由来地。

Barong Bali (Bali)
Barong Loreng Gonteng (Kendal)
Barong Gondorio (Grobogan)
Barong Kemiren (Banyuwangi)
Barongan Dencong (Jepara)
Barongan Singo Karya (Demak)
Barongan Gembong Amijoyo (Blora)
Barongan Gembong Kamijoyo (Kudus)
Barongan Juwangi (Boyolali)
Reog Ponorogo (Ponorogo)
Reog Banjarharjo (Brebes)
Reog Sunda (Bandung)
Bebegig Sumantri (Ciamis)
Hudoq (Kalimantan Timur)
Singo Ulung (Bondowoso)
Burokan (Cirebon)
Ondel-Ondel (Jakarta)
Badawang (Sunda)

わたしの語体験では、ジャカルタを含むジャワ島で耳にしたバロガンとは巨大な大入道のような衣装や張りぼての中に人間が入って動き回るものを指している印象が強い。ブタウィのオンデロンデルがその典型例だ。上のリストの最後三つはそのたぐいであり、その前の一連のものは巨大なものを人間が担いだり、中に入ったりして動かすものという点に共通性があるだけだ。それらがバロン芸能という言葉で一括りにされているのだから、バロガンと呼ばれるものの姿が必ずしも獅子やトラであるとは限らないことになる。バロガンという言葉に獅子のイメージを常に重ね合わせると、すれ違いが起こる可能性は大きいだろう。

さて、ブローラでのシゴバロンの物語はどうなっているのだろうか？これはブローラ県庁のホームページから得た内容であり、県がこれをオーソライズしているものと思われる。

バンタルアギンのアディパティ・クロノ・スウォンドノはクディリ王宮の王女デウイ・スカクタジ Dewi

Sekartajiを妻に得たいと思い、宰相プジョンゴ・アノムを使者に遣わした。プジョンゴ・アノムは四人の隊長に率いられた144人の騎兵部隊を従えて出発した。

魔界の地ウンクルの境界まで来た時、一行は境界の防備を厳しく命じられていた領主アディパティ・グンボン・アミジョヨの軍勢に行く手を阻まれた。グンボン・アミジョヨはトラの王シゴバロンに変身してバンタルアギンの軍勢をなぎ倒し、騎兵部隊は全滅した。四人の隊長はほうほうの態でアディパティ・スウォンドノへの報告に走った。

一方、ジュンガラ Jenggala の王子ラデン・パンジ・アスモロ・バグン Raden Panji Asmara Bangun もデウィ・スカクタジを妻に求めようとして、王子の付き人ふたりをクディリ王宮に派遣した。ふたりは逆の方向からウンクルを通過してクディリに行こうとしたのだが、そちらの境界でもシゴバロンが行く手をふさいだために戦いが起こった。このふたりも形勢不利になり、クドゥンスレゲゲ Kedung Srengenge にいる兄弟弟子のジョコ・ロドゥロ Joko Lodro に応援を求めた。[続く]

「ヌサンタラのライオン(10)」(2021年03月17日)

シゴバロンも三人に攻められてはたまらず、ついに倒されて生命を奪われた。ところが、グンボン・アミジョヨは不死身の術を持っていたのである。再び生き返って戦いを仕掛けて来られては、三人もたまらない。王子の付き人はこの大問題を報告するために王子のもとへと走った。怒った王子はシゴバロンと対決するために出発した。

一方、自分の軍勢が敗れたとの報告に怒髪天を衝いたクロノ・スウォンドノは秘宝サマンディマンの鞭を携えて戦場に駆けつけ、シゴバロンに勝負を挑んだ。さすがにサマンディマンの鞭が持つ神通力にはかなわず、シゴバロンは倒されたためスウォンドノに命乞いをし、隨身することを誓ったので許されてその配下になった。

遅れてやって来たバンタルアギンの軍勢を率いてスウォンドノはそのままクディリに向かうことにした。プジョンゴ・アノムやシゴバロンも一行に加わり、クディリのアルナルンまでやってきたところで、アスモロ・バグンの一行と鉢合わせになった。アスモロ・バグンはウンクルでシゴバロンを探したのが見つからず、そのままクディリまでやってきたのである。

こうなれば、ただで済まないのは武人の定め。ましてや恋のさや当てが上乘せされている。クロノ・スウォンドノとアスモロ・バグンの一騎打ちが始まった。そして最終的に、勝利の女神のほほえみはラデン・パンジ・アスモロ・バグンの頭上にきらめいたのである。

クロノ・スウォンドノはあえなくクディリのアルナルンで生涯を閉じた。バンタルアギンのひとびとは領主が倒されたのだから致し方がない。プジョンゴ・アノムを含めて全員がアスモロ・バグンを支配者に仰ぐことになった。アスモロ・バグンはそれを許したが、シゴバロンだけは別だった。アスモロ・バグンはシゴバロンに呪いをかけて永遠にグンボン・アミジョヨに戻れないようにし、その上でシゴバロンが隨身することを許したのである。

アスモロ・バグンとデウィ・スカクタジの結婚の祝祭には、クロノ・スウォンドノを除いた上述の登場人物がすべて加わって楽しく陽気に踊り狂った。その伝統がブローラに残されて、現在にまで受け継がれている。だから、ポノロゴのレオツにはクロノ・スウォンドノが登場するが、ブローラのバロガンにクロノ・スウォンドノは出て来ないのである。

バリ島のバロン上演が神事とされているのは、霊界の者たちがまとわりつくがためにそうなっているのかもしれない。バロンが観客を楽しませるための演じ物として始まったのは、19世紀にクルンクンの王が所望したことに端を発していると言われている。しかも話の内容がチャロナラン Galonarang であるなら、それはアイルランガ王にまつわる物語であり、古代ジャワの故事に多くを倣った可能性は小さくないと誰しも思うようだ。ワロツの修行方法や規律、男の生き方の規範や種々の術をマスターする手順などはバリ人のものときわめて類似しており、古代ジャワ文化がいかにバリ文化の中に浸透したかというのをそれが物語っている。

こうして、バリのバロンはレオツポノロゴを土台にしたものだという説が有力になった。バリのバロンがレオツから受けた影響として、レオツのバロガンから孔雀の飾り物を外した形がバリのバロンと同じであり、ランダ Rangda の装束はブジャンガノンそっくりであるといった点が語られている。

もちろん、レオツポノロゴとバリのバロダンスが似ても似つかない様式で演じられているのは、その通りだ。レオツのシゴバロンが踊り狂うとき、バリのバロンは静かにゆさゆさと繊細な動きをキープする。ストーリーが、様式が、動きが、バリ人のものとして作り上げられたとき、ジャワのものとはまったく別種のも物が完成されて行ったのだろう。

われわれはそこに、バリ人とジャワ人というまったく性格の異なるふたつの種族の特徴を垣間見ることになるのである。チャランポランと言うか自由奔放で明るく陽気なジャワ人と、しかつめらしく冷静で規律を尊重しようと努めるバリ人の違いは、まるで水と油のように見える。[続く]

「ヌサンタラのライオン(11)」(2021年03月18日)

バリのバロン劇に登場するバロン像にはさまざまな種類がある。すべてがシンハだと思ったら大間違いで、トラ・犬・イノシシ・象などさまざまなバロンがいる。それはバロンが村の守護神の具象化であること、そしてバリ島の中でさえ、各土地・各森林を守護する者が異なっていることに起因しているためだ。

バリのバロンで最も普遍的代表的なのがバロンケケツ barong keket あるいはバロンケツ barong ket と呼ばれるものだ。バロンケツはライオン・トラ・牛・龍が寄せ集まった姿をしている。バロンケツはふたりの人間が中に入って動かすのだが、なにしろ巨大で、高さは人間の背丈の二倍くらいある。雌雄のつがいになっていて、雄はジュログデ Jero Gede、雌はジュロルツ Jero Luh と呼ばれる。

バロンケツはバリ島でもっとも頻繁に演じられている上演プログラムなのである。演じ物にバロンケツが登場するときはたいていランダも出演するのが普通で、バロンケツはダルマ(正義と善)を象徴する者になり、アダルマ(悪と邪)を象徴するランダと対決する。善悪正邪が両者そろって絡み合うところにこの宇宙の真理が映し出されているというバリヒンドゥ哲学の宇宙観を示す演じ物であるがゆえに、おどろおどろしい姿のランダが出て来なければこの宇宙は成り立たないことになる。

バロンバンカル barong bangkal はイノシシの面と姿を持つもので、バロンチェレン barong celeng とも呼ばれる。バンカルとは大きな牙を持った雄の大イノシシを指し、雌はバンクン bangkung と言う。バロンバンカルもふたりが入って動かすものだ。バロンバンカルはもちろん村の神事に上演されるが、ガルガン=クニガンのような祝祭のときに町内を回って家々を訪問し、その家の厄払いを行うのに使われることが多い。

バロンランドウン barong landung はまったく動物らしくなく、むしろ人間の姿に近い。巨大な張りぼてに人間がひとり入って動かすものだ。ブタウィのオンデロンデルのバリ版と言うほうが分かりやすいかもしれない。張りぼての腹の部分に小さい穴が開いていて、演者はそこから外界を眺めつつ踊ることになる。バロンランドウンはひとりで出てくることもあれば、仲間と一緒に出てくることもある。複数のときは、マントリ Mantri(王)、ガルツ Galuh(王妃)、リンブル Limbur(側室)などの役割を持たされる。

バロンマチャン barong macan はその名の通りトラの姿をしている。ふたりの人間が入って動かすが、イノシシと同じように、祝祭のときに家々を回って厄払いを行う仕事が多い。バリの舞踊劇に登場することもある。

バロンクディンクリン barong kedingkling という演じ物はバロンブラスブラサン barong blasblasan とも呼ばれる。バロンノンノンクリン barong Nong nong Kling と呼ぶ人もいる。これはひとりひとりがワヤンオ

ラン wayang orang の装束にバロンのような仮面を着け、ラマヤナ物語のシーンを数人で演じるもので、これも村の神事のほかに祝祭のときに家々を巡る仕事も多い。この上演はギアニャル・バンリ・クンクンで盛んだ。

バロンガジャ barong gajah は珍しいものであり、バロンの中でも特に神聖視されていて、バリ人ですら見たことのない人がいる。面には象の鼻があり、象牙の他に牙も生えている。このバロンはふたりに動かされる。バロンガジャが行われるのはギアニャル・タバナン・バドゥン・バンリの限られた村だけで、これも神事の他に、祝祭のときに家々を巡って厄除けを行う仕事が多い。

バロンアス barong asu は犬を象徴したもので、面には長い牙がある。これもふたりの人間が動かすものであり、バロンガジャ同様、タバナンとバドゥンのごく限られた村が持っているだけだ。神事や厄除けに家々を巡る仕事もする。[続く]

「ヌサンタラのライオン(終)」(2021年03月19日)

それらの他にも、龍の姿をしたバロンナガ barong naga、ブロカン burokan という頭が人間の女になっている馬、そしてフドツ hudoq というカリマンタンのものとそっくりなバロンもある。フドツはサイ鳥 enggang の姿をかたどったものだ。

バロンブルトウツ barong brutuk は他のバロンとまるで異なっている。これはトウルニャン村のプラの境内で行われるもので、動物姿のバロンとはまるで無縁のものである。浄められた21人の青年村人がヤシの殻の面と乾燥させたバナナの葉で身を覆い、手に鞭を持って境内中を走り回るのである。

トウルニャン村に伝わる通過儀礼の神事とされており、他の種類のバロンとは神事という点以外にあまり共通性が感じられない。

バンリのプゴタン Pengotan 村とクニン Kuning 村には三眼のバロンケツがある。あるとき、プゴタン村のスードラが木彫りを作っていたとき、バロンを作れという神の啓示を得た。そしてかれの脳裏に三つ目のバロンの顔が浮かび上がって来たのである。あたかも超自然の力に動かされるかのように、そのスードラは三つ目のバロンを作り上げた。

村が疫病に襲われたとき、その三つ目のバロンは村の周囲に防御壁を立てて疫病が村へ侵入するのを阻んだことをバンリ王が知り、霊験あらたかなのを称揚して聖体としてそれを祀るように命じた。

それにあやかりたいとして、近隣の村々がそのバロンと同じものを作ったが、すべて目は二つだった。昔から続いてきたバンリの伝統村落の中で、わが村のバロンとして祀られているのはバロンケツがマジョリティだ。他にはバロンマチャン、バロンブラスブラサン、バロンランドウンを持っている村もある。

バロンブラスブラサンの場合はハヌマン Hanoman、スグリワ Sugriwa、トウアレン Tualen などの姿になり、村内の家々を巡る。その家の庭の樹や植物で病んでいるものがあると、バロンにその樹に登ってもらい、病を断つお祓いをしてもらう。

バンリの村々でもっとも人気の高いのはバロングニン baron ngunying だろう。これが行われるときはたくさんの村人が見物に集まって来る。それが行われるのはたいていプラのピオダランやガルガン＝クニガンの祝祭にからめてのことで、バロングニンに出る者はトランス状態に陥って、ヒヨコを丸ごと食うのである。中には食欲旺盛な者がいて、ヒヨコを10匹、羽の一枚も残さずにきれいに平らげる。

翌朝目覚めると、かれらはまるで何事もなかったかのように、普段の日常生活を開始する。あたかも、トランス状態になってヒヨコを食ったのは別の人間でもあったかのように。大勢の見物人が確かにその目でかれがヒヨコを丸ごとムシャムシャと食ったのを見ているのだから、手品であるはずがない。ところがかれの排泄物の中にヒヨコは羽一枚、影も形も現れない。

男の村人はたいてい、このバロングニンに出た経験を持っている。経験者の話によると、そのときヒヨコをもらえないと腹が立って怒りが爆発しそうに膨れ上がってくるそう。ところがヒヨコをもらった瞬間に、めったに感じる事のないほどのうれしさが、大きな至福感になって心を満たすのだとかれは言う。

生きている生のヒヨコをそのまま食うようなことは、トランス状態に陥ったそのときでなければ、かれらもしない。そのときに限って、ヒヨコを食うことにたいへんな喜びを感じるのである。「そのときのヒヨコの血の甘さったら、他に比べようのないものだ。ヒヨコの腸はまるで即席麺のような感触だ。そのときの自分は他に何も感じるものがなく、ただ満天の法悦感の下でそれを行っている。」と経験者は物語るのである。

バロングニンの祭事が終わると、出演者たちにはアラツが一瓶与えられ、それを飲むことで自分が祭事の中で行ったことが忘れ去られる。そのあと、香が焚かれて聖水が与えられ、それを飲んだら元の自分に立ち戻るのだそう。[完]